白菖阿繁顛末
くさのあやめのおしべのありさま
二編上

A492
2

<48-8290>

古ハ冊子を繰るに虚を吐ねバ實を記さねバ見る人なし　古今看客の変更する斯の如し

アヽメン堂お世話中となつて切支丹の魔法のとゝ

妄語を擔ぎ出し　てい子供衆でも合点をなさゝぬ故おさゝ紀ガ霊

夢も虚蛇ぞと有の侭ふ打まける大雨と時の廻り合せと頭ゝふ断つて

見ると不側も驚く肝心の蛇の尻尾も出ず様なれど再び毒蛇ふ出

舎くるお繁が後の顛末ハどうなる事ゝ未ご爰に知るぬ所ゞ白昌由縁

紫色の藤沢在子安村ゝる名はしあふ奇き談を次編ニ掲ゞ全く首尾を結ぶ

明治十三年三月中旬

岡本起泉

相州箱根塔之沢温泉之図

塔の峯阿弥陀寺

川越藩生駒郁作

王のと藤吉

巳之助母おさき

うつの社

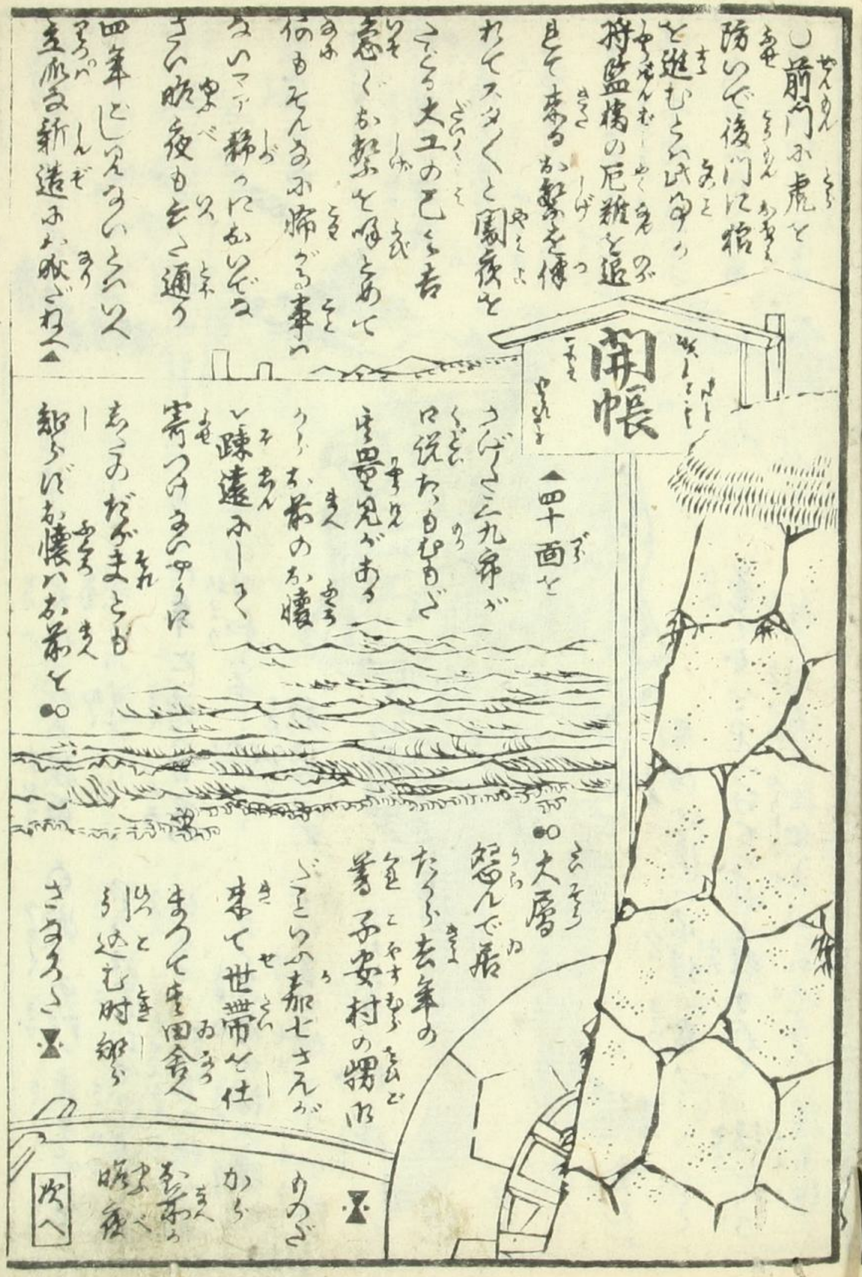
深沢の瀧

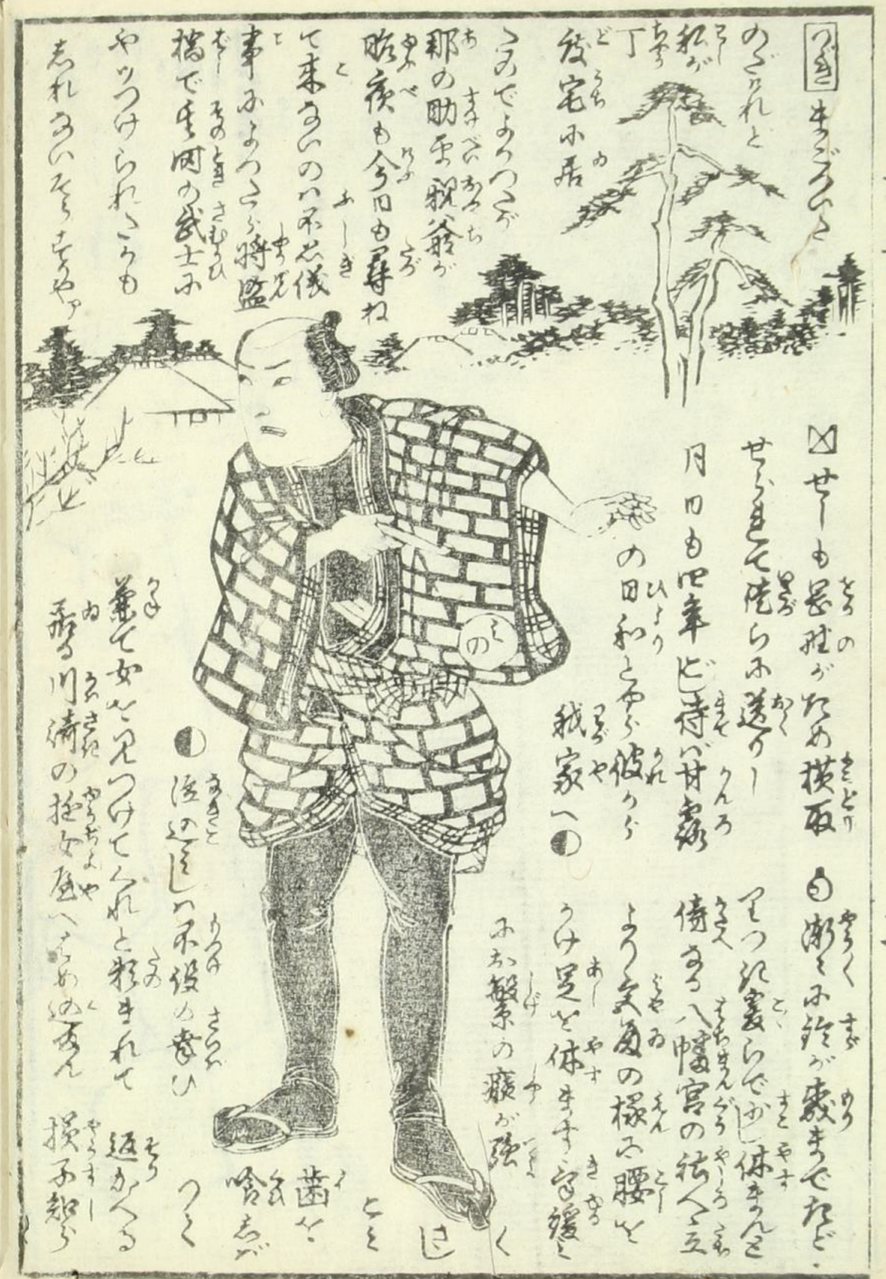
観音堂

うつの弥五郎

川越藩用達岡野三九郎

勝驛山
熊野権現
地藏堂
大工
巳の吉


開帳
四十面を
大層
賑んで居
去年の
暑ふ安村の
ぶこらふ都七さんが
来て世帯を仕
まつて生田舎人
寄つけ
疎遠ふーく
懐ハお茶と
新造ふ



つゞき　生ごろのこの
のこりれと
紅が
丁
我宅ホ居
うみでおつつが
郷の助兵衛殿
昨夜も今日も尋ね
て来るのハ不忠儀
事ホおつこう将監
様で生国の武士ホ
やツつけられこうも
あれあいそうもやア

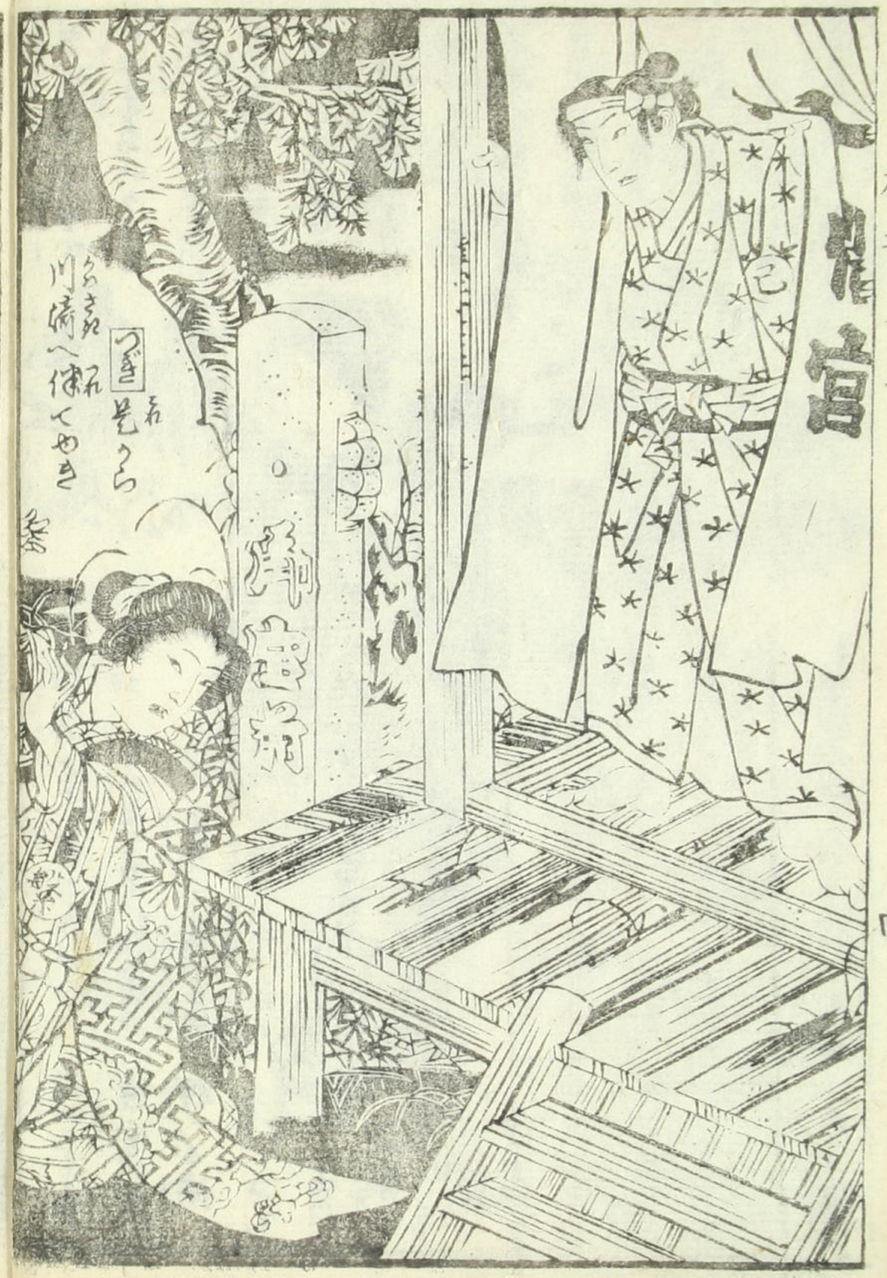
☒せーも長程がなめ横面
月日も四年ど待い甘露
の日和とゆふ彼ら
我家へ

白潮くみ絞が歳まで
てつ江実らでかし休きんを
倩る八幡宮の祝くこ立
ろう夫婦の様ホ腰と
うみ足と休きすぎ緩と
ホお繁の疲が強く
歯ど
歯ど
喰ちが
つく
逢の逢いホ役の者ひ
義と女ど見つけてくれと粉きれて
乗る川清の拾女屋へ
揆ホ繁ら

甘いめのこ安心
へ出来あいうふ日
の内いかしてあい
て夕方うふ出うけと
ものく十五六里も
ある子安村まで
送つてあげるのハ
大抵の祝切ぢゃア
ありきのせんせとにホ
ハのへとむホハ
兼てお祭と
だゆらふ如斯ホ
ろと上げと吸つと☒

この跡義四方繁と夜ホ入つ
つと出ーて人目に思ホ頬蒙り
急いで岩川宿
と通う西ーこ
ねばもこ吉い
途方に暮れ
押へる御
さえ
あれ
果ー
洗の水と
☒家ホ逐人の字
書ゆ」と安んせー
四方たこまり拘の
義ホうふ笑ひで悩む
掬ふて口ホふくゆせ
ちつうあーとお祭の
紐とつくづくぢめ
テモ笑くーひ
女子ーめナ
お繁ホ奉抱ーあぢら

次へ


花宮
つぎ見るうち
川崎へ使てやき

後がつくと明日
くらい姫の相
をあわ
るの
だがるあや
助ふあ初綾
をせーめさせるい
情いものごとふ内
おあるがウン
と踏伸
まられて
つぎ入

つき 美中と見へると花雪を
お繁さんくと呼ぶ苦痛に
逃げも出れば
六内一寸

お用帳して辨まんと社
前へ対し帳り書き振舞とおさんと
もる時狗先ぶーと音

■逃げんとする所を
捕へ
てもえ
おゴレ繁
さんマアいこナ
とうよせる
いこだお繁
い始めて
を知と暁
出を
伝切ぶして
もこ
らの

して藤つく藤家のお繁
物めて逃なれ、こえさん
皆ざくろモウ
とのくどこえ
放さ治ツ
ちらつ
辨とーて
お知と
伝ふ
ら如何の
ゆとおさんと
はるふお繁へ
繁さ今美中で ☒ 悲しく
☒ あーー留み
伝事をさ
伝とふべき。
◐ ちひと押ふー
れ情ぐんと
■ 今文 況八
で
ある更
べ世留の
人心
粧る
き
み
あと
悔て

つゞき

徐々人の渚オあ手る
波の音いと抱凄く同男
のこゆて助と色めぐ紀俊さ人
あじにあ人る女弟花拍雅ホ
殘う風時ゆと晃ろむくと巳こ吉
ハ和じき生く奴ま与と云人
ろげ幸と寄そホとアレと
いさ衣物ゞとまれと
如伝のせん栗弱き
脇の力さ人月まゞ出ゞ成

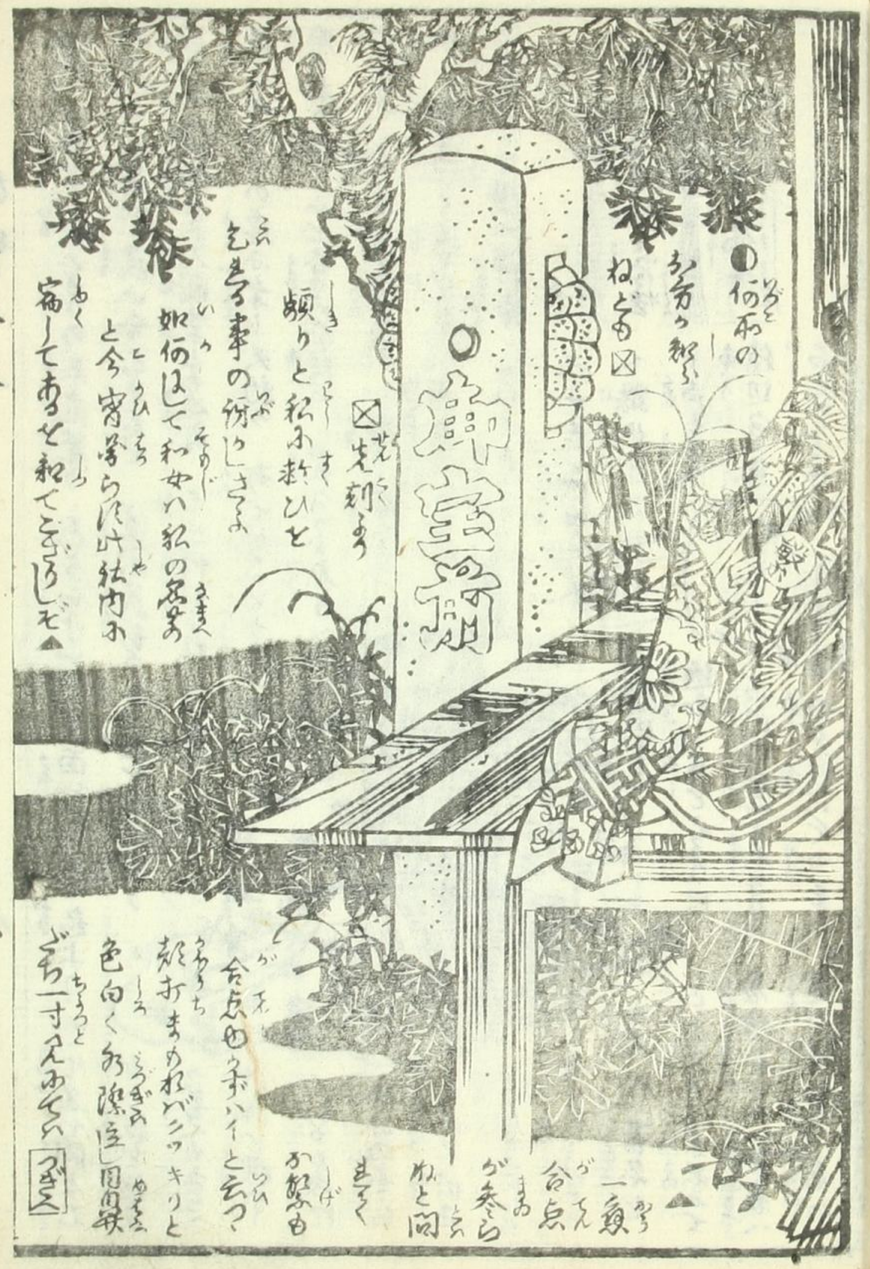
時ま紀れ宮殿の振ろ
花ゆて逃ゝと走る之巳之
吉べきろハさ思と引戻ス
帯の結目ハこりと解く
ろくと思るお祭い一生懸
命伯父さん免しを巳ま吉ん
助けて下さいと縋ゞ女吉叫ぶ
と抱とも世ゞ巳ま強情な小亜
麻老女いゞぶ喚いても人里離
見こ氏狂ゞて居るのハ
八まん損ぞろうだろう
注ゞの損ゞ親者して
七指八例せずて自由に

これと度者ホ
めゞくお祭と
押つけてさホ
程不吹ゞる商業に
及ちんと寄折しも社の
戸帳をサト押あけ現られ
出る美少年脳むわが
あるして体巳世ゞ走ゞと
駄目カ色し殿様を降りて
密と後の方へ歩ゝる之

つゝみバ呂
透れ
ん
とあ吉ろ
つゝ巳之
さん後
生ゞろ
助けて之
声を限
ゝ呼ぶ
ゝ紀ゝあ
少年ハ

次へ

つき　手をのばして
実盛の首を見て
腰筋を引抜き
ぐつと投遣て
向もせず側
ヨリ
引起せば再
ひ繁るく面
持と花もこそ
上押結めモウ
めい成ものい
私が頼のけ
ぶ一体和女へ



つゞき 女子ゝとゞまるべきの若流慈り ○らちゝ己れ吉の面を考めて起上り ○ハ世名を同じ乙
やさしくゝなれど兵ゝ今己れ吉と 傾ゝ不義ちゝる松が枝を拾ひ取り 女も鍼を怒ぶ
而て投ゝる働きゝの人間業とも思へ 己れ何奴ゝるわい狂魔ひろぐと 心義も為さ
投差中ゝ身の虚ゝ業ゝ天物ゝ 打ゝ加ゝるをゝ事ハ類 ばゝと嘆ゝ
魔物ゝ私のゝと奪ゝゝと現ハ 笑ゝぶゝ尤りへ てゝるゝゝに
れゝのゝゝ方まゝゝとゝへを 外ゝ咲ゝゝけ 残ゝの上ゝら
怖ゝくゝゝしゝく返ゝゝも 花香の如ゝく身を 打ゝ倒ゝし彼ゝ
ゝゝゝを嘆ゝし狂ゝ ゝハゝ急ゝ 安ゝんゝゝ長ゝと
ゝゝゝ 己れ吉と邪ゝ 縁ゝと和ゝげヤヨ
ヘ跳ゝ例ゝ 女中 私ハ其名を
ヤ声と共ゝ 逃ゝ出ゝ足をゝゝに 己れ吉と名ゝ去ゝて
傾ゝ辺ゝる烏 品川の方へと走りゝる 義ゝ侠ゝゝ仇ゝ敵ゝへ
石とゝゝる 投ゝゝそ ゝゝ送ゝゝか事ハ 通ゝる道ゝゝ者の

投ゝゝそ ゝゝの剣へ立 石と傾ゝゝと 為ゝゝ怒ゝと業ゝゝ高ゝ
ゝゝて。 救ひゝゝり決ゝて怪ゝ紀 ゝらゝゝも和女の危難を
去ゝゝゝゝとゝて ゝゝゝゝ
ゝゝゝ此ゝゝ一通ゝ ゝゝゝゝ上を
捨ゝゝゝで物語ゝ ゝゝゝゝ今ゝゝ
逃ゝ法ゝ大工の ゝゝゝ者の
ゝゝゝ同ゝ模ゝゝ仕合ゝ
ゝゝゝゝ ゝゝゝゝ
ゝゝゝ在ゝゝ ゝゝゝゝ
ゝゝゝ在ゝゝ ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ ゝゝゝゝ
ゝゝ

つき 私の実の母はきのとせ去年の春に江戸の世帯を
畳み元郷の新七と云ものの方へ引のこされてゐる
事ゆゑ新七と云者を出来ドロ[illegible]と同れて
[illegible]の助が[illegible]お前はお[illegible]さんと作るう
[illegible]して[illegible]が私のあと
[illegible]おまへの
母又おきのさんは私の
命の祝[illegible]

▲通り過られぬ怨を吹ふ
たる折もなく通りかゝ
女は即ちお芳の母又
子安村の高貴家にて
[illegible]
おきのご
のゆえ祝切
[illegible]
けて使ひ
新七どのと二人の女
き女花と受さのこ
[illegible]
面会別の石塔と

中巻

の為に十四年の歳月を成て
帰ることなくてはならぬ事の悪しい世と二度
あなたとお[illegible]と夫婦の振ひ休ひまもうこの助い
[illegible]次のこの[illegible]ら[illegible]て放ひ[illegible]
で踏み[illegible]殺されしが[illegible]迎れる海の[illegible]

芳川春濤閣本店
毒婦之阿傳 東京奇聞 七編 色吉原雪糸物語 三冊
嶋田一郎梅雨日記 五編 東京開港横濱繁華花岡奇縁譚 二編
白菖阿繁顛末 三編 御所櫻梅松録 十編
坂東彦三郎一流 三編 界隈名所旧跡 廣瀬栗亀 三編
澤村田之助曙草紙 五編 新板物語雪月花
幻阿竹噂聞書 三編 櫻田祝町二番地 編輯人 岡本勘造
川上行義復讐奇談 二編 浅草瓦町十二番地 出板人 綱島亀吉

芳川春濤閲
岡本起泉撰

揚洲周延畫

二編中

中浅井屋

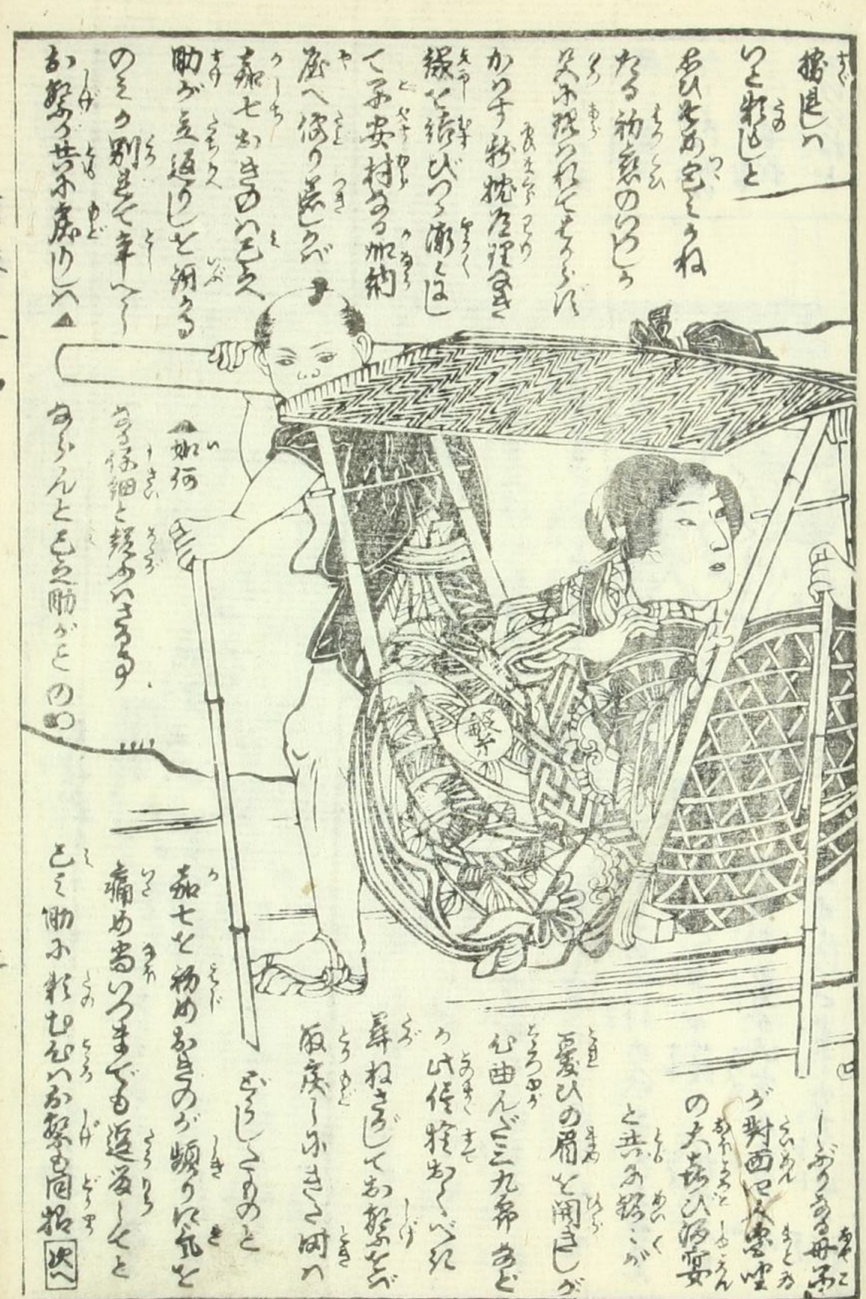
白菖花繁顛末

二編廻中

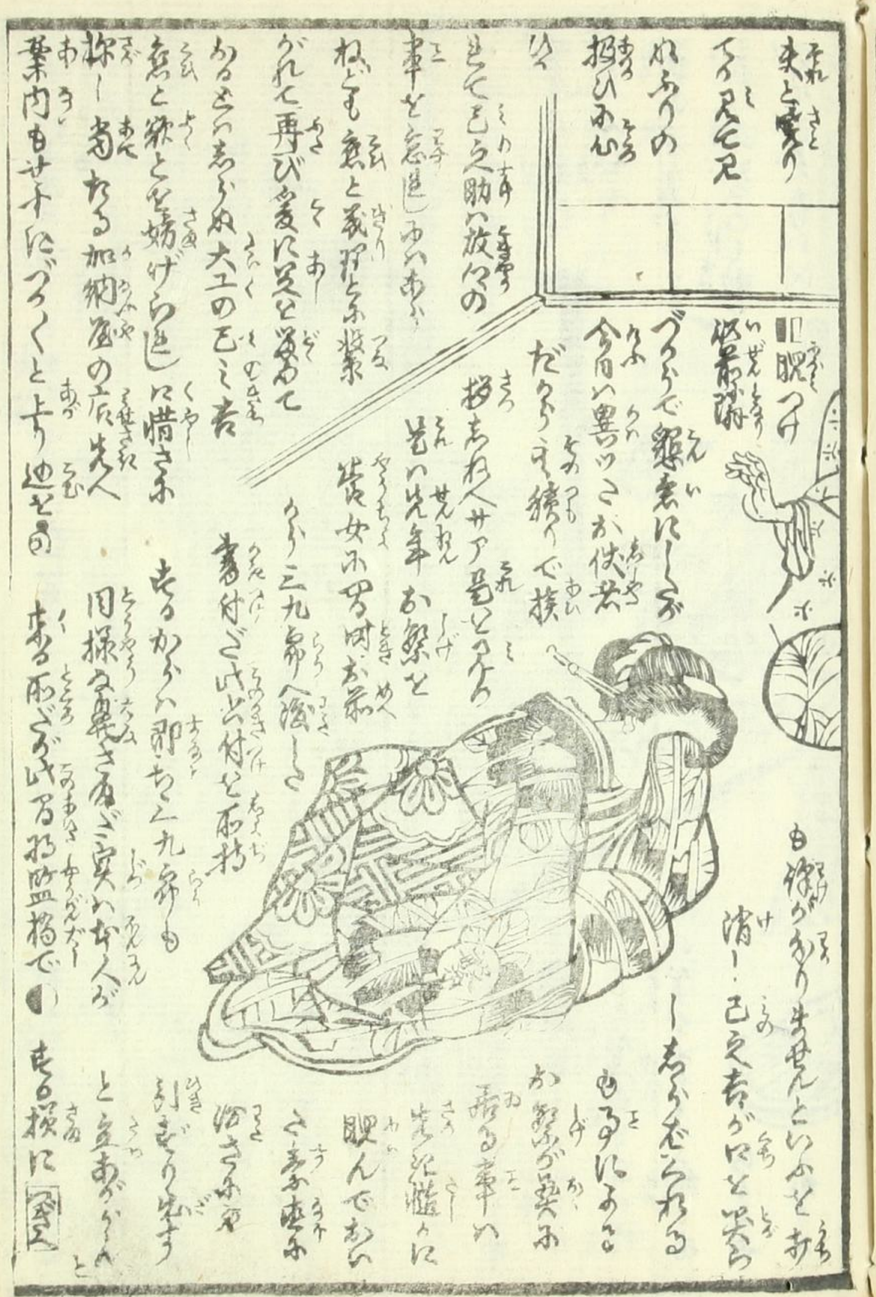
芳川閲
岡本綺
周延画

細島版

つるぎ
お繁
いと
久
助ぶ
水際
まー
用容狂
ふカの
己
大器と物語るさま尾
ふつつてお繁ハ又始めと
ひだり長こゝろ終りと
吐せバ
怒ると
一位一什と
皆終る
茄七
あきのハ
頻りに
嘆ド
或ハ怒り或
ハ泣ごろ
不安儀くと
もろうそ文

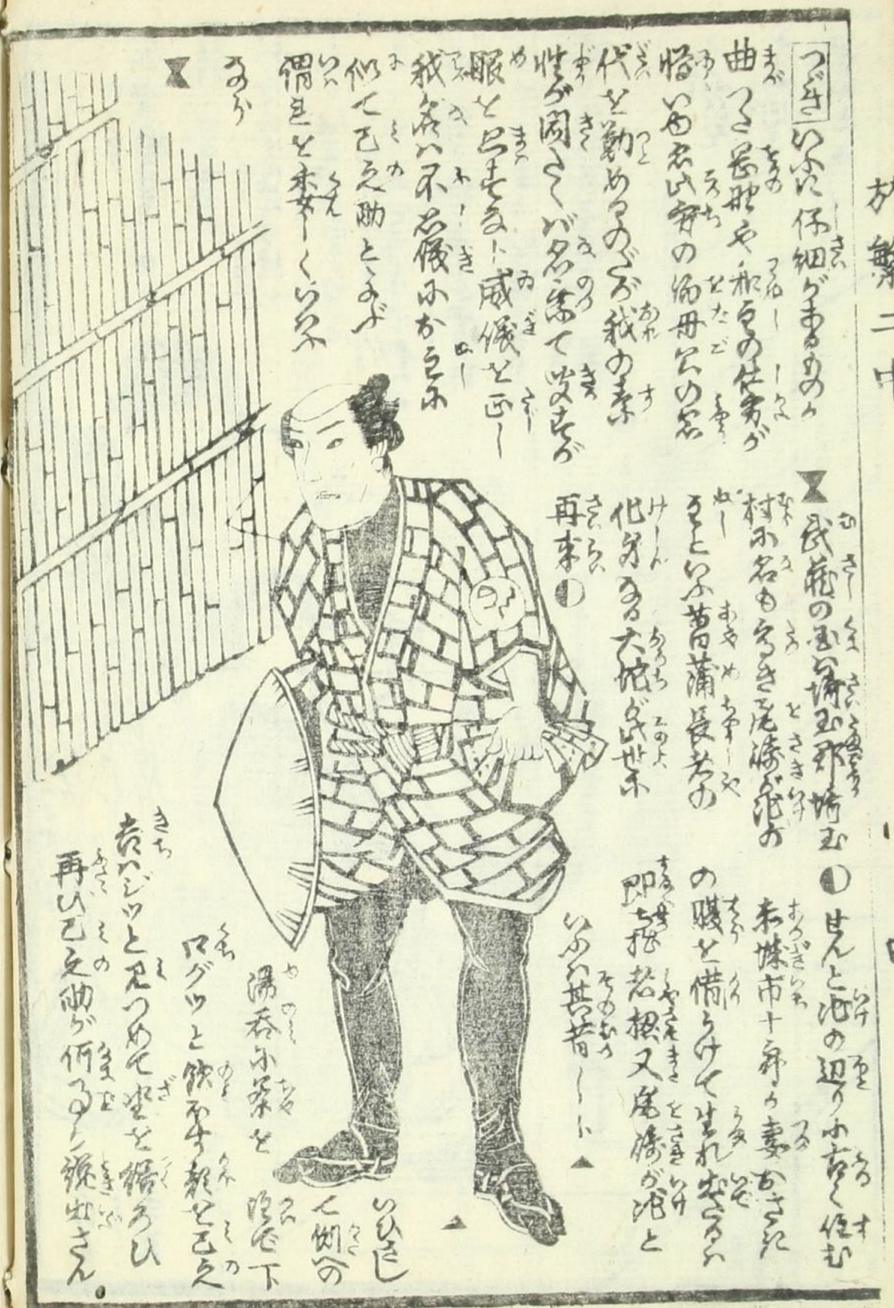

猪是ハ
いと物と
お繁ハ
ある初恋のいとう
かりす物恨を狂ふき
縁と結びつゝ涙とは
てふ安村ある加約
屋へ俗り長こゝ
茄七おきのハもと
助ぶ立返りと物ゝる
のゝ別れと幸へ
お繁ハ共ハ帰りへ
如何
茄七
茄七と初めおきのぶ頻りに乳と
痛め者いつまでも返答しと
とゝ助ふ軽ひ乳いお繁も同拍
しぶりある毋ハ
ゞ對西四人愚吐
の大坂ひ海安
と共ハ銘こが
憂ひの用と聞きしゞ
ゞ曲んゞこ九弟ハ
ハ代性物くゞ
尋ねきゞしてお繁ハ
飯度ーふきさ問ハ
ぶりしさものと

つぎ一回あり
側と敷
たく内儀の
とい母祝
ふいつねど
加七
い君の綾人そと出迎ふと
早くもとつけておきのい
繁るれオヤくどこへおきさん
とりあと
陸絨をして出るのて我が来ぬ
お繁が出宅へ出てゐる
だらう四の五のいつて
ゆ浮され人とは出付
を代皮所へ結出し
て絶をあすすぞ
ぞうぞうくと結ゐる
ゆそ加七へ田舎の仆納
出はふるくと廃迎をるを
かきのが引のけ出そこを出さん
とこと事が薮くう様のその
柳合お繁が出宅ゆ事へ帰る
ちのちらしと事のの君遠う地


来と繁り
ゑう足元元
ぬふりの
招ひあい
もそこを助い故々の
事を忘邑)ゆいあい
ねども意と義理ふ紫
がれて再び愛に気を変て
ゐるちらぬ大工の乙こ者
意と欲とを嫉げら邑)に惜さふ
探ー者ゐる加納屋の娘先人
業内もせ下にづくと上り迎を同
脱ぐ
緊張
づくで緊張にしぶ
今日ハ異ッさか伏者
だらうと続くで接
招ちれ人サア君とかたろ
君い先年お繁と
裝女ふ男時お家
ゐ二九郎へ溶しと
書付ごせ出付を布持
ちるかふ邪ちこ九郎も
用探ゐ裏さ有ご実いお人ぐ
ゐる雨ぐ出百羽監指で
ゆ懐がもり失せんといふを扇
清ー己と者がにと笑ら
ーちらぐらゐる
ゆるにゐる
お繁が異ふ
ゐる事い
先江戸に
腰んでおい
さ事ゆふ
溶さふ
引まり出す
と立あがらん
ちる接に

つゞき　おきのい湯ーと袖引かゝ　ものくさ生死を考へて肥か付れば
　　　

つゞき いふに仔細のあるものゝ
曲つくり長唄や和らの仕方が
悟いの名代の細冊名の名
代を勤めるのぶる我の素
性ゞ図さくば名高て安もぐ
服とらまるゝ威儀を正し
我名八不名儀ふかるゝ
仰て色之助とゝゞ
偶是と変ーくらゝ
ゝゝゝ



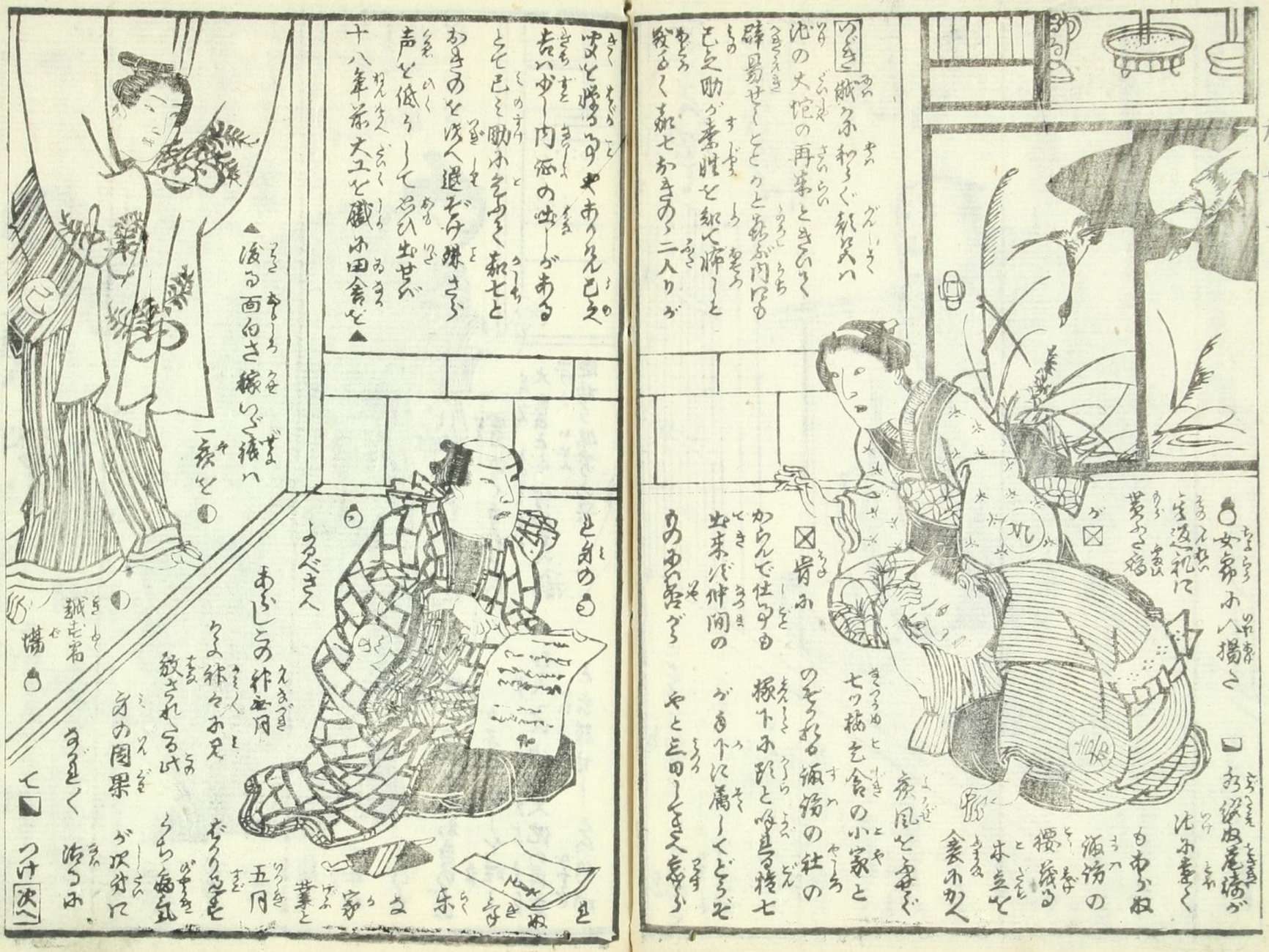
▼武蔵の国ら埼玉郡埼玉
村ふ名も久きき尾張が沈ゝ
るとらふ菖蒲長老の
化分ゝる大蛇が化せ不
再来①

①甘んと沈の辺りふ高く住む
未妹市十郎ら妻あされ
の職を備らみて生れ出ざるゝ
即ち拾郎又尾張が沈と
いふ人甚者ーー。▲

いひたし
と例への
湯呑ふ茶を
口グッと飲ゝて新を正之
表ハシッと足つめて変を猪ゝひ
再ひ正之助が何ゝ現出さん。

きせんわさ
加納左衛門

と考を留めてもウあゝ沈を
見ゝゝゝ菖蒲長老
の来歴も尾張が
沈の因縁も残ら
ず紙ふ知ら
ある和ハ此
方が為
きどゞ
生
是之交
ゝーー見て安ゝ紙ふ
ゝゝゝ返事くも
不忠義者



いづき 織名ふ和ゝぐ新兵衛
沈の大佗の再事ときのく
肆易せゝとと乃と義ふ内ぼる
己之助が蜜性を紀七師しと
殺るく紀七おきの〻二人りが

女郎ふ八揚さ
生返祝に
夢ふさ殺
お俣ぬ尾張が
沈ふ幸く
も市ふぬ
浜彷の
獨義る
ホ立と
義ふカ人
疾風と幸ぐ
七ッ橋を舎の小家と
のそろる浜彷の社の
橋下ふ跡と呼ぶる特七
が自下に潜〻くどろど
やと三日〻さ人殺ら

世の中と呼るのも有りんも己之
去ハ少〻内佗の出〻がある
とて己之助ふ名ふく紀七と
おきのを浜人退ぞみ殊さら
声ど低らして殺ん出せば
十八年前大工を職ふ田舎ど

▲浜る面白さ稼いぐ猫い
一疾ど

世の中
あぶしふの仲間
ちよ様々お足
殺されるぬ
子の図果
ちち毎乱
五月
葉と
家
さ
乗
ち
安
世
ぬ
ぬ
が次分に
ぬるみ
ぬるく
ぬ
世

城宝者
構

つぎ
我慢の出来ぬ
血気のさゝり夜の
俄然ふ話らゆと
小家を一人で
逃出し那
地たち
▲
▲
入り
仲右
▲
▲
▲

つゞき

あらんぞ
あらんぞ
あらんぞ

つゞき　三九郎へ渡しこ出村とゞこして
爰ふ御特しくろと待りしふ見い
お新ふが家出世四五日即ち已
の吉が行ゞ表ゝ逃海しとう
三九郎が尋れて来りしが
已の吉の墓と三九郎は
おしげと横面せ世に眼ゝ
ありしと故実を待ゝべ
お新ふ一昨夜世話を尋
ねて来ゝる田金後りし
とゆき虚ゆ一人で
ゆき方へ出立せ〜と
ゆて三九郎ハ涙れふ

歩行が自由でなく故伝馬
高代をしてられの駕
と要ひ出奴を続しと
おしげ吉の
の指ふせん
と虫ふ
爰世ゝ
なきのゞ
続し男舎ハ
箱根の酒元
切ゝと備り絵用の
金と出出付を取り
尋ねて来ゝる

ゆしを悔ゝ長い御繁
の口上を伝ゝて出入座
爰の生詞とゆく

乳母とゆひ
なので出入を出られ
長ゝ〜さふ見眼
ともあしげ
とゆ房ゝて
腰慰をせんとゆ
どゆ監視で横腰
を打痛ゝぶ強ゝて

続りであり
しげ体ふ行方に
面舎〜長面で祝ふふと名舎ゆとも

九郎ハ
在原
ゆら
ゆと
ふ

つゞき 子とあの紙のむハ皆一ツ始めて
曉る蓬莱の時を拔ぜば化人の姿と
女郎ハ妻ろとあるを見て帰色
きらゆるりしと名ひふ文遠りてい
ひ未とまあ蓬に雖義のうらぬ
ゆりは出村い面あ仕て来さ
れど安ぜい却て
彼の疑惑を増ん
妻ひ彼ハ名安村の
ゆをといい初ば仮空も見い
見ようと文帰り当と九郎と彼ろて
は浸寂さて だてと世ハ中ハ
動めてあんと初めて解し 仇心

◐ 寄ふ指ふと主陸
郎七あきのいあ案
と法とるもと
出ぐ 茅の苦労い
どこへやら △

△ 寄く
りて色
ぶ
色の苦
白歡び
て
あ
あい
変へ
一泊して聖物
ゆ沢へ
ぬ主せり

芳川春濤 閲 岡本建泉 撰

其名高橋毒婦之阿傳 東京奇聞 七編	色吉原実説物語 三冊		
嶋田一郎梅雨日記 五編	東京と開横濱と蒸花岡奇縁譚 三編		
白菖阿繁顛末 三編	御所櫻梅松録 三編		
坂東彦三郎一流 三編	界隈名所 府藤栗毛 三編		
澤村田之助曙草紙 五編	新板物語		
幻阿竹噂聞書 三編	編輯人 櫻田祝町二番地 開本勘造		
川上行義復讐奇談 二編	東京瓦町十二番地 出板人 鯛島亀吉		

東京都
千代田区
神保町
岩井屋

はるあやめ
初ものはけ
ふりゆきて
二尾んの下

嗚鶴堂
春棒

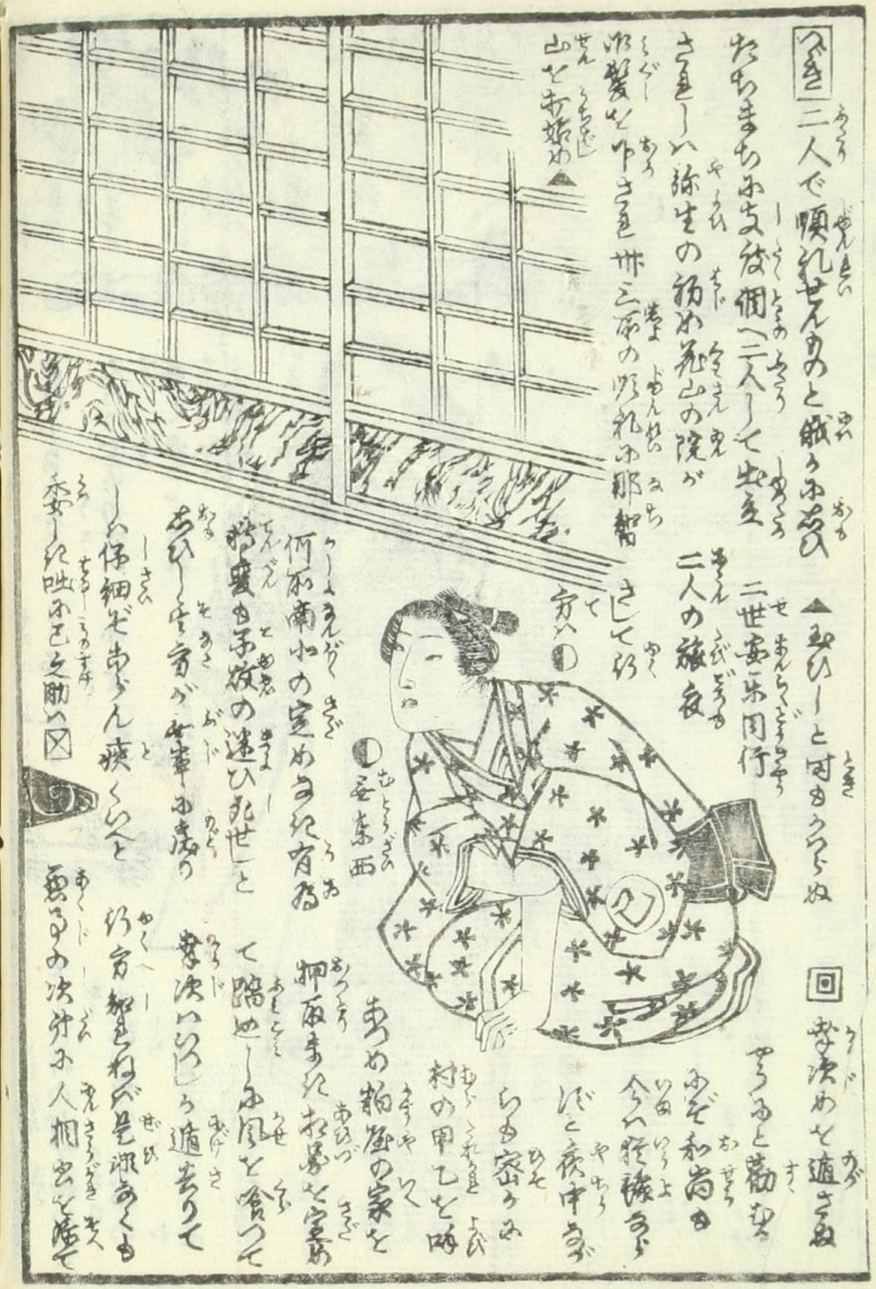
春陽園
起泉閣
国延画

◐後醍醐の帝が愛
情深き男子を勅使として
紀州に再び来れりのと子安
村に生れ一日数年の
如く成人する。

▲清玉村へ立帰りて
紀家に仕へ孝行を尽く
する程健の有様を聞
き及ぶ又不審と近所で問ば
二月の末に
天火と
やらで
焼失
[illegible]
親

○物も
己れ助へ
己が命を救へ
是一生恩人の娘
なるお縫を救ひ一名忠義の
誉れを不忠義なる父が出あるを我身の
[illegible]を知るにつけ是迄受し災難も沈の崇で
あるとの知らねど安治を手伝ひ[illegible]と
聞むる那七とおきの人眼と苦げんい表げざ◐

特に村なる所弥陀寺へ立退しこの
事ゆえ之助い敬多兵衛次の事ハ新
忠義者の所弥陀寺へ赴むき[illegible]

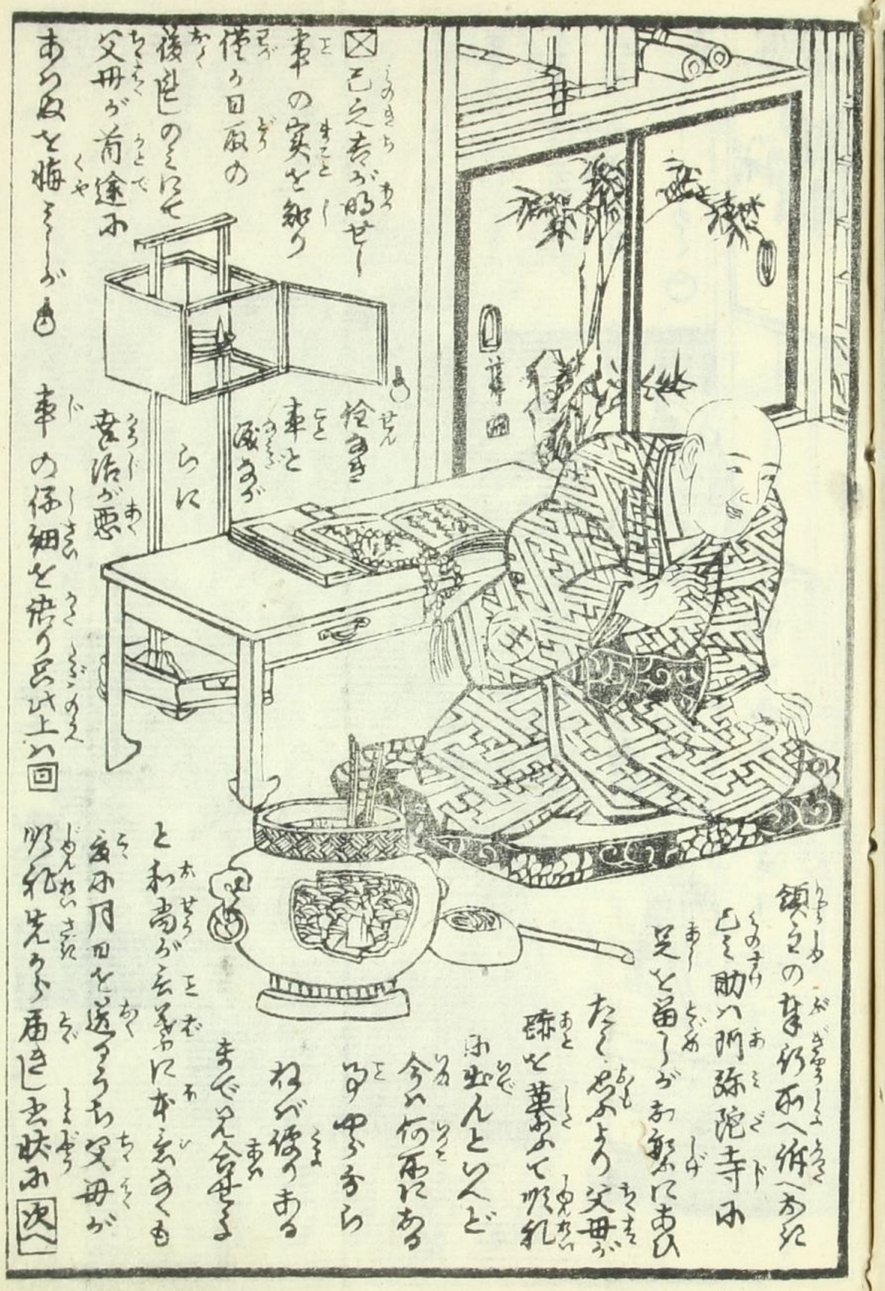


つぎ 二人で順礼せんあと紙ふぶくあちらまちまちのふち後個(二人)して出立 二世安楽同行 二人の旅衣 さて〳〵八幡生の初め花山の院が 御製とゆかさて世三原の順礼ふ那智山と市姿め

▲ひしーと対ふうらぬ 回 安次めと道さぬ

やうやうと勧めて 和尚ふ 今八狂旅ふ ひと夜中ふ らふ宿ふめ 村の甲乙ふ呼 歩め物産の家を 押取まれ和尚と宿 て臨ぬしふ風を貪つて 安次いろ道ふ 行方知れず是迷ふくも 委しく吐ふ乙助八 区

何和尚の定めふ紀有る 妙蓮ふ放の迷ひ孔世と 〳〵ふ伝細ぞ市ぶん疾くと



区 乙助ふ名ぶ明ぜ 事の実を知り 俺ふ目風の 後世のくに 父母ふ前途ふ あらぬを悔くーぶ 回 安次ふ悪 事の伝細を伝り民代上八回

捨ふ 事と 風ふ

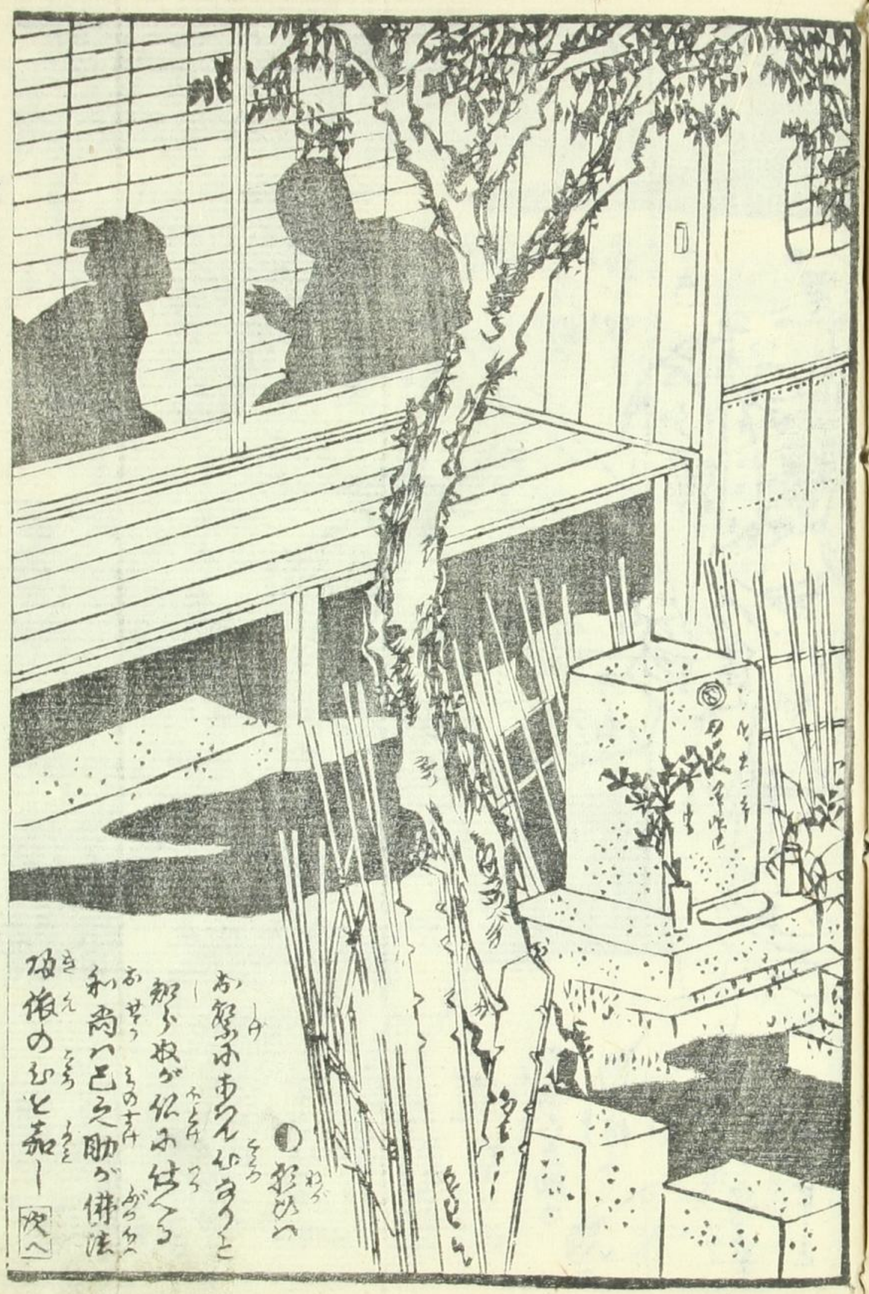
らに

領乙の事行あへ伊へ紀 乙助八所弥陀寺ふ 足と留ーふ和歌にあり たく父ふより父母ふ 跡と葉あて順礼 ふ出んとりんど 今八何所にある ふ中ふら わ八俺ふある きぐ乙会せる と和尚ふ云ふに本云くも 安ふ月日を送ふち父母ふ 順礼先ふ届き去状ふ 次八

つゞき

ようく〻六月
上旬吳濱の八谷汲へ
參詣せしが甲
州路より江戸へ
出て東海道を
上方へ登る筈なり
あらとある小藪が
見えう路と考ゆ
東海道にて四ツ
あめの必定なり
ゆゝしもよく〻

先立
せんと
この
已之
助が張
あ



彩めい
お駕かゝあれ如ようと
那ゝ枝が伝ふ結くる
和尚は已之助が俳法
攻後の如と和ー
攻へ

つぎ
幸次
路と急いで
田と畑を要
村を加納へ
と出さもれば
己之助は藪と
放し
走れ
藪が如
家
出とせーと
の夜己之助の
行一

仕
ゆくとの迷出
とーく
と
せー
ゆ
ゆく
と
迷入
生
出
生
蹴ゆく
足ひよ
えもぐ
蔵
表
次へ

つまるところ悔むに甲斐もなきの日と
酒飲の落が
涼しく送る
傳言の酒盛
陀寺に彼の
巳之助が面
縁ある寺
小仙よりの
名ばかりとい
ども彼が藤
蔓に
ら紀恋の
姫様様
ありんとぞ

○四五羽もぐ
小不安村や
発足しらく
再び故父主
道ゆく程
見よりの故
戻りぬ
○世の中の
附合の有りる
と変ふ為めし
お繁と伴て戻
らんと己之助ハ
家紙が自慢
○甲川原の上流の繁花と
白る塔の深箱根七湯の
生中の美人も落く深
津の瀧へ筋の
白糸や
あんざるあい
あらわ共
お繁い外出が
義理ふ
深く
の
の
迫て蔓の根の長紀旅路の合羽
交氏様の敷物に成る身と深く
とあの姉さん忘らるる
[illegible]

▲菊根の泉
卯

つぶき
卯

決へ

つゞき

金八郎

藤これば酒
治らこゝぐ
お勢の在所
と尋ねん
と逗留中
お勢が家ふ来るとそうけて
接子と揚まべ武士と共ふ
逗留するとの事ふ扨い是まで
生駒めが何所へ密ふ隠しくまそ
温家のさめこそ伺ひ酒治の保密に
く

☒ 半接が宅ふあらぬ時
いお勢にあとをとゝ
もものと接〜ふ
出藤の屋ふ関て来
まらア失とも威張こ
だろうこの動転もまうが
紳も身い紙の盗れを
て御家の出入を止めやうが
と眼こと逗さとあつてあ
ふ今日とふ今日かう姫
拠を押へと上い喝の
者も出さ〜
れ人サア丸田の屋

此ウ〜ふ〜ふこの時尋ね来〜あと戯へ
表び戯へ怒り十分出来と並べこう
お勢を此方へ面底〜満々の上ふ座安へ
作へ外作の役をあげ
てこられんと勢こんで
案内をあく外作が
往安へ通るあ〜ぶかみ
れい二人へ驚る紀新え食を
何と辞由甚の日あつら撥と冷〜
て身を懐つ〜遁んとする御路をあく
こつつくお勢を面て押へて三九郎へ声あらば
オイ生駒へ先ア秘ふ何と云と四角べし秘を眠うて
人の姫を慰む拒ま不束な外作と夢ふ丸田の番の戒しあわゞ ☒

を接〜そうこう
一件お勢を今
と伺ふ座敷
てあき番ろ
こオイ伺ふと云
れ人ふあるやア
異じ出ある先
生駒の川越
の蔭中ごろ草の
こちいこが人目の性
へ極無ふ和
ごらつ

人の姫を

010190516992

つゞき 畧取しこみたる共絵柄のあるゆゑ接せ ▼ 為るのゞ「夫ゞ母は弱さ為がお義怨ホ一通りハ写てやらうと女を多る親云も「コヽ那奴のヲハ江戸へ行って此方ハ為敵がある上ハ何と親を忘けられても仕様がネエモシお武士その一云ずゆの云伴ゆく共ゆ多義で爭ふ云都て猶りゝ出ずく彼の怒りを博し我身ぞろうゆ都を迷惑とるゆ お敵人さいと分ら且ずと胸をきろて敵と蒐れ只何ずゆ伝様と云弟ハ自の怨り江戸へ帰つて云伴せ此恨ハ必ホ 啓るゆ敵ゆ 仲しゝと寝るゝ お新ハ母の毒ひ必ホ紙ゆ 多ホゆる伴ゝ外ホ伴細のるゆ也ゝ少ゝ由 生弱さ多ホ糾ハ母の委しゝるゆを 志故父さん 是と放しゝと押へられさるゆ先ゝ拝へと中ゝ放さず 已ホ何ゆ関ハ世ゆ敵ゝそゆろゝと云ゆゝゆ 引きあけて 此一サア一死ホゆけ何とゞろくるのゞ是ゝ亜ホ江戸へ ▼

御届明治十三年二月廿三日
糀町区一番町六十一番地
編輯人 岡本勘造
浅草区瓦町十三番地
出版人 綱島亀吉藏版

芳川春濤閣岡本起泉叢

世話物 高橋壽婦之門傳 東京奇聞 七編 色吉原雲系物語 三冊
鳩田一郎梅雨日記 五編 横濱土産 花岡奇縁譚 三編
仇菖阿繁顧末 三編 御所櫻梅松録 上書
坂東彦三郎一流 三編 界ふ 府藤栗毛 三編
澤村田之助曙草紙 五編 新板物ふ教訓
幻阿竹噺聞書 三編 編輯人 岡本勘造 櫻田区町二番地
川上行義優譬奇談 二編 出版人 綱島亀吉 浅草区瓦町十三番地